資料７－３

屋久島世界遺産管理における西部地域について

１．世界遺産としての価値や管理計画における位置づけ

（１）世界遺産としての顕著な普遍的価値

（2013年にユネスコに提出した遡及的陳述（rSOUV）より抜粋）

【ｂ．登録基準の証明】

○ クライテリア（vii）（自然景観）：

（略）

○ クライテリア（ix）（生態系）：

屋久島は、北緯30度付近では稀な高山を含む島嶼生態系であり、他地域ではほとんど失われてきた暖温帯地域の原生的な天然林という特異な残存植生が海岸線から山頂部まで連続して分布しており、自然科学の各分野の研究－進化生物学、生物地理学、植生遷移、低地と高地の生態系の相互作用、水文学、暖温帯地域の生態系のプロセスーを行う上で非常に重要である。

【ｃ．完全性】

資産はひとかたまりの土地から成り、全ての異なる植生帯を含み、また島の中心部の原生的で重要な地域を含む。資産には、島の西部の海岸線から標高約2,000mの山頂部までが含まれ、海岸付近の亜熱帯性植物を含む海岸植生から山頂付近の冷温帯性のササ草地・高層湿原に及ぶ植生帯の垂直分布の連続性が確保されている。

（２）屋久島世界遺産地域管理計画（該当箇所抜粋）

＜遺産地域の概要＞

・西部地域では昭和30年代にかけてパルプ用木材の伐採が行われ、昭和35年（1960年）頃まで松脂採取、炭焼き、農業などで生活が営まれていた。

・西部地域を通過し、照葉樹林の中で間近にヤクシカやヤクシマザルの観察ができる西部林道（車道）の利用も多く見られる。

＜管理に当たって必要な視点＞

ア．生態系等の統合的・順応的な管理

・遺産地域である西部地域では、人間による土地利用の変化とともに、ヤクシカの生息数が著しく増加し、下層植生や落葉等の過剰な採食の結果、構成種の単純化や森林の更新阻害、裸地化による土壌流出や一部植物の絶滅が懸念されるなど、遺産地域の生態系や生物多様性への大きな影響が危惧される。

＜管理の方策＞

①生態系と自然景観の保全

・特に遺産地域でもある西部地域では、ヤクシカの採食圧による植生への影響が著しく、林床植生の食害に伴う希少植物の消滅や不嗜好性植物の優占による下層植生の単純化、天然林の更新阻害等が懸念されている。

・西部地域ではヤクシカの生息密度が高く採食圧による生態系への影響が著しく、一方、南部地域ではヤクシカの生息密度が比較的低く生態系への影響が軽度であるなど、地域によってヤクシカの生息密度と採食圧による生態系への影響が異なることから、各地域の実態を踏まえ関係行政機関は連携して対策を講じる。

②自然の適正な利用（（オ）西部地域）

・西部地域は、海岸付近に生育する亜熱帯性植物を含む暖帯の植生から、冷温帯の植生に至る、顕著な植生の垂直分布が見られる地域である。公道が遺産地域内を通っている屋久島で唯一の場所であり、観光利用が活発に行われている。また、県道下の半山・川原地区は、アコウ、ガジュマル等の亜熱帯性植物やシイ類、カシ類を主とした暖温帯常緑広葉樹林が広がり、ヤクシカやヤクシマザルの野生生態を間近で観察することができるなど、近年、トレッキングや写真撮影等を目的とした利用が増加傾向にあり、野生動物への餌やりなどのマナー低下に伴う生態系への影響が懸念されている。

・この現状を踏まえ、西部地域の半山・川原地区の利用方針は、利用施設等の整備は行わず、遺産登録当時の生態系や自然景観が適切に保全されることを前提に、適正なルール下における限定した利用の中で、屋久島の自然の価値及び自然と人との関わり等について体験学習できる最適の資源として活用されるものとする。

（３）屋久島西部地域におけるヤクシカ管理実施計画（「第二種特定鳥獣（ヤクシカ）管理計画」の下部計画）（該当箇所抜粋）

・西部地域をゾーニングし、一部のみにヤクシカの個体数調整を導入し、その管理を行うことで、屋久島の世界遺産地域で唯一残された海岸部から高標高域まで連続した植生の垂直分布の保全を図ることを目的とする。

・本計画では、対象地域を３種類の区域に区分する。

－瀬切川右岸は、沢環境を基盤として、世界遺産の価値を担う多様な植生の回復が期待できるとともに、ヤクシカの個体数密度の高い保護地域の外縁部に位置することから、ヤクシカの全島的な個体数管理にあたって、保護地域外への個体の流出防止の観点から重要な位置づけにあることを踏まえ、ヤクシカの個体数管理区に設定する。

２．西部地域に関する近年の議論

・2017 年、2019 年に、西部地域におけるヤクシカ対策（計画捕獲の実施）に関して現地意見交換や科学委員会（ヤクシカ WG）での議論を集中的に実施。

・ただし、特に現地意見交換では、ヤクシカの捕獲の是非に議論が終始し、その考え方（価値観）の違いから、西部地域のあるべき森の姿について、十分な議論が不可能であった。このため、その後のヤクシカ WG において、世界遺産としての価値（海岸から連続した植生の垂直分布）と照らして、何を優先的に守るべきかという観点で、必要なモニタリングを実施しながら、瀬切川右岸エリアにおける対策を進めるという判断に至った。